女の顔

上

平岩弓枝

の顔 上

平岩弓枝

文藝春秋

女の顔 上

昭和四十五年九月一日 第一刷
昭和四十六年十二月三十日 第十二刷
定価 五六〇円

著者 平岩弓枝
発行者 樫原雅春
発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二一一
郵便番号一〇二
印刷 大日本印刷
製本 矢嶋製本
万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© 1970 Yumie Hiraiwa Printed in Japan

0093—360610—7384

目次

日本の娘……5
故郷は緑……35
冬の陽……66
十二月……98
あやつり……131
妻の家……168

下町……199
じょうびたき……228
昔の恋……258
尋問……286
鬼ごっこ……318
異郷……351
花ぐもり……383

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

女の顔

上

装幀　粟屋　充
題字　中田　功

日本の娘

サンフランシスコを発った時、機内はすいていた。

日本国の飛行機なのに、客の三分の二はアメリカ人のようであった。

まさきは窓側の席にすわり、よく晴れたサンフランシスコの風景をなめ下にみつめていた。

金門橋もベイ・ブリッジもくっきりとみえる。別離の感傷は不思議なくらい無かった。

「帰りたくなったら、すぐに帰ってくるんだよ。日本人だからって、必ずしも日本が住みいいってものじゃないんだから……」

用事がすんだら、なるべく早くに帰って来たほうがいい、と空港の待合室でいよいよ別れるまで繰り返してくれた山本和代とその夫の清治の声が、まだ耳に残っている。

サンフランシスコに住む日本人夫婦で「胡蝶」という名の日本料理の店を持っている。

昨日まで、まさきはその店の従業員であった。

まさきは膝の上にのせていた四角い箱包を空の高さまで持ち上げた。

「母さん、お別れよ……」
故郷を去って二十余年、遂に生きて日本の土をふめなかった母の骨であった。
元気な間は、ついぞ、日本が恋しいとも、帰りたいとも口にしなかった母が、死ぬ二日前に、ベッドの傍にいたまさきにぽつんといった。
「死んだら、やっぱり日本へ連れて行ってもらおうかしら。そのほうが、ゆっくり眠れるような気がするのよ」
その時、まさきは母のやせ細った手をじっと握りしめただけであった。
しんと閉じていた母の瞼の裡に浮んでいるだろう日本を、まさきは知らなかった。
三歳で離れた日本である。
記憶は殆ど無いに近い。
明るすぎるようなサンフランシスコの港の光景がすっかり遠ざかってしまってから、まさきは骨の包を膝へ戻した。
アナウンスが、ベルトをはずしていいと客に知らせている。
すでに安定した飛行を続けていた。
「あの……お荷物、こちらのお座席にお置きになってかまいませんですけれど……ハワイからは、搭乗なさる方があるかも知れませんが、それまでは……どうぞ……」
通りすがりにスチュアデスが親切な声をかけた。
普通の荷物は大抵、足許においている。頭上の棚は帽子かコートぐらいしかのせられない。ま

さきがしっかり膝に抱いているので、スチュアデスの眼にも、大事な品と映ったのであろうか。まさきの隣は幸い空席であった。

「ありがとうございます。でも、もう少しだけ、こうしています」

礼をいって、まさきは骨箱を抱え直した。母が不安がっているような気がした。決して帰りやすい日本ではなかったのだ。

「あの、失礼ですが……日本へ直行ですか」

遠慮がちな声に、まさきは眼をあげた。

通路をへだてた席に、日本人の青年がいた。さっきから話しかける機会を待っていたようである。

青年の肩越しに、隣席からこっちをみている老婦人の顔がみえた。眼許がよく似ている。母親なら六十歳前後と想像されたし、実際、その年配にふさわしい大島のきものであった。着こなしが、なんとも、きりっとしている。

「胡蝶」のママの山本和代の着こなしのうまさを見馴れているまさきの眼にも、それはきわ立って見事な感じであった。素人の御隠居様にしては威勢のいいものが、体にあふれている。

老婦人が、まさきにやさしい目礼を送ったので、まさきはあわてて更に深く会釈を返した。

「ハワイへ行かれるのですか」

青年が問をおいて、別に訊ね直した。

「いいえ……」

「それじゃ、日本へお帰りになるんですね」
少しためらって、まさきは結局、うなずいた。帰るには違いなかった。
「そうですか。そりゃあよかった」
青年が母親をふりむき、ポケットから名刺を出した。
表が日本字で、裏が英語になっている。
「僕、真岡慎一郎といいます」
名刺を渡しながら名乗った。住所がサンフランシスコになっている。勤務先はまさきも知っているサンフランシスコの大病院であった。
「実は、母が日本へ帰るんです。僕は仕事の都合でハワイまで行くので、そこまでは同行出来るのですが……ハワイからは母一人になります。羽田には迎えが来ている筈ですが、何分にも飛行機は、始めてなので……」
よろしく頼むと真岡慎一郎は頭を下げた。
「私も飛行機は始めてなのです。でも、私でお役に立つことがございましたら、なんでも致します」
そう答えるより仕方がなかった。余っ程、旅なれているようにみえたのかと、そのことが気恥ずかしい。
「ありがとう。助かりました」
息子の背後から老婦人が嬉しそうに、再び会釈している。微笑を返し、まさきはふと、うなだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

れた。骨箱の中の母より、はるかに年上の婦人が、息子と共に外国旅行をしている元気さが羨ましいようであった。

おそらく、外国勤務の息子の許へ、様子をみがてら遊びに来た帰りでもあろう。それとなく、眺めると、老婦人は座席にきちんと正坐していた。膝に大きなショールをかけている。草履はそろえて、席の下におかれていた。

ホノルル到着は正午であった。飛行時間はかっきり二時間である。

搭乗客はみんな一応、おろされた。

サンフランシスコでは、空港のビルに飛行機が横づけになるのだが、ホノルルではタラップを下りて、リムジンで空港のビルへ案内される。リムジンを運転したのは、現地人の大きな女性であった。黒い肌に白と黒のムウムウを着ている。

まさきにとっては、なにもかも始めての経験であった。

空港の待合室で、青年は母親に付き添っていた。魔法瓶からお茶を飲ませたり、顔をよせて、しきりに話している。

骨箱の他にハンドバッグ一つのまさきは、はなれたベンチにかけて、窓の外に揺れている椰子の樹をみていた。

南国の空が抜けるほど蒼く、太陽が強烈であった。かなり、風が吹いている。

搭乗のアナウンスがあった時、まさきは立って、自分から老婦人に近づいた。介添を約束したからには、つとめを果たさねばならない。

「それじゃ、おねがいします」
青年はまさきを見、それから母の手を握った。
「気をつけてね。来てくれて、嬉しかった」
素朴な声であった。母親の眼がちょっとうるみ、
「あなたも気をつけてね」
リムジンに乗ってから、老婦人はハンカチーフで眼をおさえた。息子の前では泣くまいと努力して来たようである。
ホノルルからは搭乗客が多かった。日本人の団体が大勢乗った。
機がホノルル上空をはなれるまで、老婦人は窓の外をみつめていた。地上へ残して来た息子のことを、しんと考えている感じである。
まさきはその隣で、沈黙していた。
「失礼しました……慎一郎が厄介なことをお願いしてすみませんでしたね」
おしぼりが運ばれて、漸く老婦人がまさきをふりむいた。
「あの子、すっかりわたしを年寄り扱い、おのぼりさん扱いをしましてね。日本の飛行機ですもの、アメリカさんの言葉なんぞ喋れなくたって、どうってことはないっていったんだけど……」
語気に普段の調子が出ているようである。
気がついたように、右手に握っていた小豆(あずき)を二粒、ハンドバッグにしまった。
「あの……タラップでさっき、小豆をおまきになりましたわね。あれは、なんでしょう」

遠慮してきくまいと思っていたことが、咄嗟に口に出た。
タラップを上りながら、老婦人は左右に小豆をぱらぱらとまいていた。
「ああ、あれね。飛行機が落ちないおまじないなのよ。家の者が教えてくれてね。息子には、さんざん笑われたけど、でも、いいってことはなんでもしておかないと……まだまだ命は惜しいからね……」
さっぱりと笑った顔が垢抜けている。
「そうそう、名前をまだ申しませんでしたっけね。真岡春奈と申します。春夏秋冬の春に、奈良の奈……あんまり、おばあさんらしくない名前なんですけどね」
「申しおくれました。まさきといいます。津奈木まさきです」
自分でも思いがけないことに、まさきは驚いていた。アメリカで市民権を得ていた時の名は中川まさきであった。中川は義父の姓である。
それが、日本へ帰るときまって、すらすらと日本の戸籍の名が口に出た。
「まさきさん……」
いい名前だと春奈は賞めた。
国際線では始終のように食物が運ばれてくる。
ジュースのワゴンが行き、酒のワゴンが通る。
春奈は話好きであった。お喋りという話し方でないし、相手の気持を忖度しながら、なんともいい間で話しかけるので、聞くほうも押しつけがましさを感じない。

慎一郎というあの青年が一人息子で、医者であること、研究生としてサンフランシスコの病院に派遣されていることなどが快い響きで、まさきに伝わってくる。

「アメリカなんて、ベッドってのに寝なけりゃならないし、お手洗いだってへんてこりんでしょう。洋食ってのも好きじゃないし、飛行機ってのも虫が好かない。行くもんかと思ってたんですよ。だけど、一人息子が母さんのおみおつけが飲みたい、おでんの夢をみたなんてかわいそうなことといって来たら、矢も楯もたまらなくなってしまってね。親なんてだらしのないもんですよ」

大急ぎで旅仕度して、ビザやなんかは旅行社まかせ、彼女のしたことは、まず金比羅さまへ行って御札を授かって来たという。

「そしたら、友達が金比羅さまってのは航海の神さまだから、船じゃないと駄目だっていうんですよ。飛行機だって海の上を飛ぶんだからよさそうなもんだっていったんだけど……」

結局、お稲荷さんへ行って御札をもらって来た。

「どうして、お稲荷さんがいいのか、よくわかんないんだけど……」

帯の間から二枚の御札を出して楽しそうに笑う。ワゴンから買った日本酒を、静かに唇に運んで、それが実に旨そうであった。

春奈の話の中に、まさきは日本を強く感じていた。それは、かつて、母から感じた日本と同質のものであった。少なくとも、母と同じ日本の心が、春奈の話の雰囲気にあるように思う。

「アメリカに観光旅行ですか」

訊ねられて、まさきは眼をあげた。

「いえ……私、日本へは、はじめても同然なのです」
相手をみて、続けた。
「子供の時に、母に連れられてアメリカへ参りましたから……」
はっとしたように春奈が骨箱を見た。
「母の遺骨なのです。日本でねむりたいと……遺言でしたので……」
「日本に御親類は、おありなんですか」
「はい……」
母の故郷は鹿児島だった。父の家は東京の筈である。まさきはそれ以上を喋らず、春奈もきかなかった。
複雑な事情のありそうなことは、容易に想像出来る。
スチュワードが日付変更線通過のカードをくばって歩いた。七福神の絵がかいてある。
「二十二日が二十三日になっちゃうなんて、狐に化かされたようだわね」
まさきの気を変えるように、老婦人は心づかいのある笑い声をたてた。
羽田へ着陸したのが午後五時すぎであった。
暮れかけた東京を、まさきは大きく眼を見はって眺めた。
日本という実感はまだなかった。
ネオンの輝きはじめたばかりの空港はサンフランシスコの空港とあまり変らない感じさえする。
タラップを下りるとき、まさきは老婦人をささえた。流石(さすが)に長旅で疲れ切っているのがよくわ

かる。
「まあまあ、無事で帰って来たわ」
春奈の呟きには、安堵感と同時に息子と別れてきた寂しさもあるようである。
まさきの長い髪を日本の夕風が吹いた。ミニスカートの膝が少し寒い。
税関を出るまで、まさきは春奈のために手荷物を受け取ったり、パスポートをひらいたり、出来る限りの介添をした。
税関では、春奈のスーツケースも、まさきのも、簡単にチャックをあけるだけであった。
アメリカからの帰国者、入国者に対してはそれほど目くじらたてることもないのかも知れない。
実際、二人とも、法を犯すようなものは、なんにも持っていない。
国際線の出口に、出迎えの人が群がっていた。
「お帰んなさい。おかみさん……」
「春ちゃんったら、さんざ上から手をふってるのに、知らん顔して行っちまってさ」
「若旦那、元気でしたか」
がやがやと三人の女と一人の男が春奈を取りかこんだ。
「車待たしてあるのよ。くたぶれたでしょう」
春奈がふりむいた。
「ちょっと待ってよ」
少しはなれて、そのまま立ち去ったものかどうか、ためらっていたまさきの傍へ戻って来た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.